

大学生による遠隔コミュニケーションでの協働作業において 言語表現の形態が二者間の会話行動に及ぼす促進効果[†]

伊沢 慧*・中野 良樹**

秋田大学大学院教育学研究科心理教育実践専攻*・秋田大学教育文化学部**

本研究の目的は、言語的表出の形態が協働作業下における二者間の会話行動に及ぼす効果を検証することである。実験はZoomを使用したオンライン会議形式で行い、実験協力は匿名で実験に参加した。50名の大学生が実験に参加し、協働作業に取り組んだ。実験の結果は、言語表出の形態の違いによる協働作業への効果として、過度な敬語を使用することは会話内容の魅力が減じることを示唆した。一方で、大学生が日常生活と同様の発話形態を使用することは、初対面の相手とでも協働作業の進捗をお互いに調整する役割もつ発話内容の選択を促した。本研究の成果は、特に初年次におけるオンラインでの授業や初対面の受講者相互の協働性を高める知見として活用できる。

キーワード：発話形態、協働的問題解決、遠隔コミュニケーション

背景と目的

日常生活において、私たちは自分と相手との関係性に応じた言葉遣いを使用することによって、意思や情報を伝達し合い、敬意や親疎などの適切な態度を相互に示し、対人関係を形成している。

本研究は、言葉が人間の行動や感情に及ぼす影響について着目する。ある状況に先行する単語や発話内容のカテゴリーや特性が、後続する対人行動の選択やそれに伴う感情を左右することが、プライミングを用いた実験で明らかにされている。プライミングとは、先行刺激の受容が後続する刺激の処理に無意識的に促進効果を及ぼすことである。Smeesters, Warlop, vanAvermaet, Corneille, & Yzerebyt (2003) の実験において、道徳 (morality) に関連する単語をプライミングされた群は、統制群および

権力 (might) に関連する単語をプライミングされた群に比べて、協力行動が促進されることが示されている。同様の結果が、協力 (cooperative) に関連する単語と競争 (competitive) に関連する単語をプライミングした研究においても報告されている (Hertel, & Fieldler, 1998)。

以上の先行研究の結果から、言葉には意識下で人間の行動や感情、態度を変容させたり、それらを方向づけたりする影響力があると考えられる。しかし、そのような影響力は単語だけではなく、敬語のような丁寧な言葉遣いや普段仲の良い友人に対して使うことだけだった言葉遣いなどといった言葉の表現形態によっても生じるはずである。

「ポライトネス」の理論に着目すると、田中 (2011) やBrown & Levinson (1987) は、ポライトネスには“他者から理解されたい、評価されたい”という言動であるポジティブ・ポライトネスと“他者に関与されたくない”言動であるネガティブ・ポライトネスの2側面があったとした。日本語においては、滝浦 (2005) は敬語をネガティブ・ポライトネスに位置づけており、敬語は社会的・心理的な距離を表す対象人物に対する遠隔化表現であるとしている。他

2022年1月7日受理

[†]Satoshi IZAWA* and Yoshiki NAKANO**, Promotional effect of the form of linguistic expression on conversational behavior between two parties in collaborative work in remote communication.

*Graduate School of Education, Akita University.

**Faculty of Education and Human Studies, Akita University.

方、須藤・宮崎（2017）の実験では、メールカウンセリングの場面では適度な敬語やポライトネスを使用することが有効であることが示唆されている。

さらに、Watzlawick, Beavin, & Jackson (1967) は、コミュニケーションの試案的公理として「コミュニケーションは相互作用であること」、「コミュニケーションには命令的機能が内在し、コミュニケーションは行動に制限という形として影響を与える」を挙げている。すなわち、敬語などの丁寧な言葉遣いと友人に対して使用するくだけた言葉遣いは異なる性質のポライトネスを内包する。こうした表現形態の違いは協働作業に不可欠なコミュニケーションにも違いをもたらす、協働作業の過程や参加者への印象にも影響すると考えられる。

本研究では、大学生が初対面の相手とオンライン上で協働作業を行う実践的な場面を設定し、会話形態の違いが作業の内容や協働相手への印象に与える効果について検証する。得られた知見は、大学での初年次教育や学生主体の協働的問題解決の教育場面に活用しうる。

プライミングが協働行動に及ぼす影響を検討した研究では、場面想定法を用いた質問紙や囚人のジレンマゲームが使用されることが多い。しかし、これらの手法は、実際の社会生活や日常生活からかけ離

れた場面設定が多い。大学生が実際に他者と協働して活動する場面を考えると、具体的な目標を設定したうえで情報の共有や解決策の提案などをめざして他者との会話がなされることが多い。そこで本研究では、大学でも日常的に経験しうる協働的な問題解決場面を設定し、話し合いを軸とした実験課題を作成する。また会話形態の違いが状況依存で生じることの検証するため、協働的問題解決に先行して、会話形態を制限したプライミング課題を行う。

予備実験 1：協働的問題解決課題の検討

予備実験 1 の目的は、本実験で用いる実験課題を試験的に実施し、実験協力者が問題なく協働作業に取り組めること、また、その過程で一定程度以上の会話が Zoom 上でも行われるかを確認することである。

材料 独自に作成したジグソーメソッドゲームを使用した（表 1）。ジグソーメソッドとは、複数人からなる集団内で各グループ成員がもつ情報を共有および統合を行うことによって、問題の全体像を把握し、解決を目指すものである。

課題 想定した場面は、ある大学のオープンキャンパスにおいて、配布したプログラムに問題があったという設定にした。各実験参加者が、その問題の

表 1 ジグソーメソッドゲームのプログラム

【プログラム】

	学校教育課程	教育実践コース	英語教育コース	理数教育コース	特別支援教育コース	こども発達コース	地域文化学科	地域社会コース	国際文化コース	心理実践コース		
10:00												
10:30							第1回全体説明会					
11:00	第1回全体説明会	第1回体験授業			第1回障がい疑似体験	子ども発達トーク！	第2回全体説明会	地域社会カフェ	国際文化カフェ	第1回相談室見学		
11:30			第1回模擬実験									
12:00	第2回全体説明会				第2回障がい疑似体験							第2回相談室見学
12:30		第2回体験授業	プチ留学体験									
13:00				第2回模擬実験						第2回相談室見学		
13:30						第3回障がい疑似体験	第3回全体説明会					
14:00	第3回全体説明会	第3回体験授業					第4回全体説明会					
14:30				第3回模擬実験						第3回相談室見学		
15:00	第4回全体説明会											
15:30												

解決につながる別々の情報を保持しており、その情報をグループで共有し、統合することで表1の囲みになっている箇所の正解情報を補うことができ、正しいプログラムを完成することができる。

方法 実験参加者は、大学生12名であった。性別関係なく同学年の実験参加者3名で1グループを構成した。実験は、すべてZoomミーティングによるオンライン上でグループごとに実施した。実験参加者は、互いに本名・顔映像を終始提示した状態で上記の協働的問題解決課題に取り組んだ。

はじめに、実験参加者に実験の概要の説明を行った。説明終了後、ジグソーメソッドゲームを30分間行った。制限時間内に実験参加者たちが課題を達成できなかった場合、課題を一時中断し、その後課題を達成するまで引き続き実験を行った。課題終了後に、実験者が用意した解答と実験参加者の回答を比較し、このゲームの改善点を尋ねた。この作業が終わり次第、実験終了とした。なお、実験中の作業および会話の様子は、実験参加者の同意を得てすべて録画した。

改善点 PowerPointに課題の回答を入力する際に、解答欄が縦に伸びるという不具合が発見されたため、本実験ではExcelを使用することへと修正した。

予備実験2：プライミング課題の検討

本実験で用いるプライミング課題を試験的に実施し、実験協力者が問題なく協働作業に取り組めること、またその過程で一定程度以上の会話がZoom上でも行われることを確認する。

材料 実験では「指示出しゲーム」を使用した。指示出しゲームとは、見本となる図形の特徴を口頭の指示で相手に伝え、相手に指示した通りの図形を選ばせるゲームである。

方法 実験参加者は、大学生4名であった。性別関係なく同学年の実験参加者2人1組で実験を行った。実験は、すべてZoomミーティングによるオンライン上でグループごとに実施した。実験の直前に、実験で使用するExcel資料のデータを実験参加者にメールで配布した。配布した資料の確認をさせ、確認が終わり次第、実験参加者に実験の概要の説明を行った。はじめに、実験参加者を指示する役と記入する役に割りあてた。次に、指示する役の実験参加者は、指示出し用の2×2マスの正方形（図1）に

記載されている図形の特徴を、口頭で記入する役の実験参加者に伝えた。記入する役の実験参加者は、その指示に従ってExcelにある図形を選択し、白紙の記入用の回答欄に入力を行った。記入する役の参加者が、記入用の回答欄をすべて埋めることができ次第、役を交代してゲームを再開した。参加者が2人とも回答欄に記入ができた段階で、ゲーム終了とした。その後、このゲームの改善点や改良点を尋ねた。この作業が終わり次第、実験終了とした。

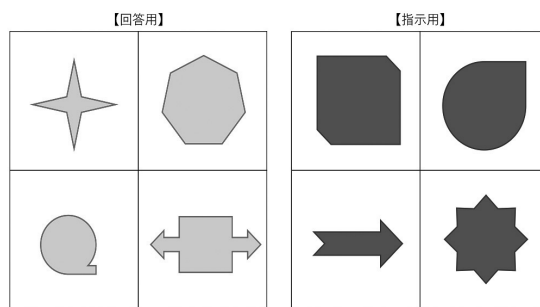


図1 指示出しゲームに使用した図形の例。指示する役の参加者には左右いずれかの枠内の4個1セットの図形が示され、記入する役の参加者には枠のみが描かれた白紙の回答用紙が渡された。

本実験

目的 言語表現の形態が、協働作業における二者間の会話行動に及ぼす効果を検討する。

方法 事前にLINE（提供元：LINE株式会社）を使用して実験参加者の募集を行った。募集の際に、実験者の身分、実験概要、実験における匿名性の担保について記載した文章を一人ひとりに送信した。その際に、実験に協力する意思がある実験参加者は、自身の学籍番号を返信した。その後、実験者は同じくLINEを使用して、実験に協力する意思があった実験参加者一人ひとりに対して必要事項（性別・接続機器・実験参加者の都合の良い日時）を尋ねた。実験参加者から実験者に必要事項の連絡が届き次第、実験者は、後日確定した実験日を伝える旨の文章をLINEで実験参加者一人ひとりに送信した。また、実験が行われる前の週に、実験者は、実験参加者一人ひとりに確定した実験日および実験日の前日に実験で使用する資料を学生メールにて送信する旨の文章をLINEで送信した。実験日の前日に、実験者は、実験参加者一人ひとりに対して実験で使

用する資料のデータおよびZoomのID・パスワードをメールで配布した。

実験参加者は、大学生50名（男性12名、女性38名）だった。各群の内訳は以下の通りであった。敬語意識群20名（男性4名、女性16名）、非敬語意識群20名（男性4名、女性16名）、統制群10名（男性4名、女性6名）であった。すべての群で2人1組の同性のペアをつくり実験を実施した。さらに、原則として互いの学年が異なる実験参加者でペアを構成し、可能な限り学部学科、所属コースが異なる参加者がペアになるようにした。また、実験参加者は互いに本名・年齢（学年）・顔映像を終始ペアの相手に提示せずに互いに匿名の状態で行った。参加者には架空の名前として、「明治安田生命名前ランキング2019の読み方ランキング50」から抜粋したものを割り振った。男性ペアの場合は「ハルト」と「ソウタ」を、女性ペアの場合は「リン」と「ヒナ」を使用した。このようにして、本名および年齢、学年などの情報をペア間で非公開にし、それらの要因による剰余変数を統制した。つまり、これらの情報が「相手が知り合いかどうか」、あるいは「同年齢（同学年）かどうか」など自分と相手との関係を推測・判断させる手がかりとなり、相手しだいで丁寧語やくだけた発話のしやすさに影響する可能性を排除した。また、本実験で同性どうしのペアを構成した理由は、陳（2003）の研究において、異性との会話に比べ、同性どうしの会話中に普通体の表現が多く使用されていたからである。つまり異性の参加者ペアで協働作業をした場合、自然と丁寧な表現の発話が促進されてしまう可能性があったためである。

実験開始前に、実験参加者は使用する資料の確認を行った。資料は、予備実験での結果を踏まえてExcel形式の資料を用いた。なお資料の内容は、統制群では、「問題解決課題で使用するシート」、「質問紙のシート」の計2つのシートから構成されていた。一方、敬語意識群および非敬語意識群では、統制群の2つのシートに加え、「プライミング課題で使用するシート」を含めた計3つのシートから構成されていた。実験参加者が資料の確認ができ次第、実験者は、実験参加者に本実験の概要および流れについての説明を行った。最後に、実験手続きに関する質疑の時間を設けた。

統制群には、問題解決課題であるジグソーメソッドゲームの説明およびZoomのチャット機能を用い

て情報カードを送信した。その後、課題に関する質疑の時間を設けた。質疑終了後、そのままジグソーメソッドゲームを20分間行った。統制群に対しては、プライミング課題を実施しなかった。つまりプライミング課題による事前の会話がないため、参加者は互いの関係性を推測、判断する手がかりはなく、後続する協働的な問題解決課題における会話を中立的な状態から始められる。

敬語意識群と非敬語意識群には、プライミング課題である指示出しゲームの説明およびプライミング刺激の教示を行なった。敬語意識群に対して、互いに初対面の人に使うような丁寧な言葉遣いで、相手の名前を呼ぶ際は「〇〇さん」と呼び、ゲームに取り組むように教示した。一方、非敬語意識群に対しては、普段仲の良い友達に使うようなくだけた言葉遣いで、相手の名前を呼ぶ際は呼び捨てでゲームに取り組むように教示を行なった。

これらの群では、質疑の時間を終了後、プライミング課題を8分間行った。制限時間内に完了しない場合でも次の問題解決課題へと移行した。プライミング課題終了後、課題の解答を提示した。続いて、協働的な問題解決課題であるジグソーメソッドゲームの説明を行ったうえでZoomのチャット機能を用いて情報カードを送信した。課題に関する質疑は行うが、このときはいずれの群にも会話形態についての教示は何も行わなかった。以上の手続きの後、問題解決課題を20分間行った。

課題終了後、統制群、敬語意識群、非敬語意識群のすべての群に対して実験者が用意した実験課題の解答を提示した。その後、実験者は、実験参加者に質問紙および実験で使用した資料の送付方法についての説明を行った。その後、実験参加者に質問紙への回答を求めた。質問紙記入後、実験参加者は使用した資料を実験者にメールで送信した。実験者がそのデータを確認でき次第、実験終了とした。実験全体の所要時間は35～45分程度であった。なお、実験中の作業および会話の様子は、実験参加者の同意の下、すべて録画した。

結果

測定と分析 指標として以下の4項目を使用した。

1. 実験課題中における第一声 問題解決課題中において、相づちを除いて最初に会話を始めた実験

参加者の一言目の発話を第一声の発話とし、酒井(2015)を参考に発話の種類を「丁寧体」と「普通体」とに分類し、それぞれの度数を算出した。表2には、条件群ごとに丁寧体と普通体の平均発話量と標準偏差(以下SD)を示した。

カイ2乗検定の結果、有意差がみられた($\chi^2(2) = 17.65, p < .01, V = 0.84$)。しかし、観測度数0のセルがあり、期待度数が5以下のセルが全セルの20%を超えていたことから、フィッシャーの正確確率検定で再度検定を行った。その結果、有意差($p < .01$)が認められたことから、群間で実験課題中における第一声の発話の言語表現の形態に違いがあったといえる(表2)。

表2 第一声の3群における平均発話量

	丁寧体	普通体	計
敬語意識群	10 (6.8)	0 (3.2)	10 (10.0)
非敬語意識群	2 (6.8)	8 (3.2)	10 (10.0)
統制群	5 (3.4)	0 (1.6)	5 (5.0)
計	17 (17.0)	8 (8.0)	25 (25.0)

()内はSD

2. 丁寧体の発話量 計25組の実験課題中における丁寧体の発話量を酒井(2015)の分類を参考に実験参加者ごとに算出した。それらをもとに群ごとに実験課題中における丁寧体の発話量の割合(%)を求めた。表3には群ごとの丁寧体の発話量の割合の平均値(M)とSDを示した。

一元配置の分散分析の結果、群の差に有意差がみられた($F(2,47) = 122.64, p < .01$)。多重比較の結果、敬語意識群 > 統制群 > 非敬語意識群の順で丁寧体の発話量が多くなっていた。

表3 3群における丁寧体の発話量の割合(%)

	敬語意識群	非敬語意識群	統制群
M	62.20	6.84	43.74
SD	13.06	9.10	13.30

3. タイミング調整の発話量 「次、言っていないかな?」や「ちょっと待って」などの自分および相手の発言のタイミングを調整した発話を「タイミング調整の発話」と定義し、発話記録から実験参加者ごとに算出した。それらを基に群ごとに課題遂行中の

表4 3群におけるタイミング調整の平均発話量

	敬語意識群	非敬語意識群	統制群
M	3.95	9.05	4.30
SD	3.07	5.54	2.45

タイミング調整の発話量を求め、表4に示した。

群間で一元配置の分散分析を行った結果、3群間に有意差がみられ($F(2,47) = 8.63, p < .01$)、多重比較を行った結果、敬語意識群よりも非敬語意識群の方が問題解決課題の遂行中にタイミング調整に関する発話が多く行われていた。

4. 会話に対する印象 小川(2000)の会話を表す形容詞対16項目を使用した。その形容詞対に対して7段階で評定させた。その全体得点を会話に対する印象評定得点とした。これらの印象評定得点をもとに、16項目の各形容詞対に関する因子分析を行った。因子の抽出法には、重みなしの最小二乗法を使用した。因子数は、固有値1以上の基準を設けた。Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転を使用した結果、4つの因子が抽出された(表5)。第1因子は「やりとりがスムーズな」、「テンポの良い」などに対して負荷量が高いことから「会話の流暢さ」に関する因子とした。第2因子は「明るい」、「活発な」などで負荷量が高く、「会話の雰囲気」に関する因子とした。第3因子は「おもしろい」、「ユーモアのある」などで因子負荷量が高く、「会話の魅力度」に関する因子とした。第4因子は「対等な」、「感じのよい」などで因子負荷量が高いことから「会話の親しみやすさ」に関する因子とした。

表6は各因子に含まれる項目について、会話に対する印象評定得点の平均値を求めたものである。言語形態の群を要因とした一元配置の分散分析を行った結果、第1因子「会話の流暢さ」において、群の差に有意差がみられ($F(2,47) = 3.69, p < .05$)、多重比較の結果、非敬語意識群よりも統制群の方が実験課題中の会話を流暢であると評価していることが明らかになった。また、第3因子「会話の魅力度」において、群の差に有意傾向がみられ($F(2,47) = 2.80, p < .10$)、多重比較を行った結果、敬語意識群よりも統制群の方が実験課題中の会話の魅力度を高く評価していた。

表5 会話に対する印象評定得点の因子分析

項目	因子				共通性	因子名
	1	2	3	4		
やりとりがスムーズでない—やりとりがスムーズな	0.81	0.06	-0.10	0.41	0.83	会話の流暢さ ($\alpha=0.84$)
テンポの悪い—テンポのよい	0.78	0.10	0.00	0.04	0.62	
息の合わない—息の合った	0.67	0.06	0.22	0.09	0.52	
反応の遅い—反応の早い	0.67	0.35	0.05	0.20	0.62	
不自然な—自然な	0.46	0.15	0.18	0.28	0.34	
暗い—明るい	0.02	0.84	0.22	0.28	0.84	会話の雰囲気 ($\alpha=0.81$)
不活発な—活発な	0.23	0.75	0.26	-0.06	0.70	
陰気な—陽気な	0.07	0.59	0.39	0.17	0.54	
不快な—快い	0.18	0.50	0.06	-0.03	0.28	
つまらない—おもしろい	0.01	0.16	0.81	0.22	0.73	会話の魅力度 ($\alpha=0.80$)
ユーモアのない—ユーモアのある	0.04	0.28	0.76	0.11	0.68	
魅力のない—魅力のある	0.15	0.15	0.60	-0.01	0.41	
対等でない—対等な	0.17	-0.15	-0.06	0.68	0.52	会話の親しみやすさ ($\alpha=0.78$)
感じのわるい—感じのよい	0.16	0.20	0.25	0.68	0.58	
友好的でない—友好的な	0.35	0.27	0.36	0.55	0.63	
ざくしゃくした—うち解合った	0.39	0.33	0.27	0.51	0.60	
因子寄与	2.82	2.41	2.24	1.95	9.42	
累積寄与率	17.60	32.66	46.65	58.85		

表6 因子ごと群ごとの会話に対する平均印象評定得点

	敬語意識群		非敬語意識群		統制群	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
会話の流暢さ	20.9	4.9	20.0	4.8	24.7	3.3
会話の雰囲気	18.9	4.2	19.7	2.4	20.7	3.0
会話の魅力度	10.3	3.5	11.0	2.0	12.9	3.0
会話の親しみやすさ	18.6	3.5	17.8	3.7	19.0	3.2

考察

本研究における重要な結果は、問題解決課題の第一声において、敬語意識群では丁寧体の発話、非敬語意識群では普通体の発話が多く行われたことである。このことから、協働作業における参加者の第一声は、先行したプライミング課題での教示や会話内容に規定されることが分かった。第一声だけでなく会話全体でも、敬語意識群では丁寧体の発話量の割合が高く、非敬語意識群では普通体の発話量の割合が高かった。これらの結果は、Watzlawick et al. (1967) のコミュニケーションの試案的公理が主張したように、第一声の発話そのものが後続するコミュニケーションへ命令的機能を及ぼしたと考えられる。つまり、協働作業中の会話に使用される言語形態は、先行する状況や会話によって連続的に規定されることを明らかにした。

さらには、敬語意識群では統制群に比べ、協働作業中の丁寧体の発話量が多く、同時に会話への魅力

度が低かった。丁寧な言葉遣いは、形式的な状況や場面で多く用いられる。しかし、プライミング課題で丁寧体の発話を必要以上に行ったことで、協働的な問題解決課題中の会話も形式的な内容に留まってしまったと考えられる。結果として、作業終了後には会話への魅力も低くなった。一方、非敬語意識群では、他の群に比べてタイミング調整の発話が増加した一方で、会話の流暢さは統制群より低かった。くだけた言葉遣いは、大学生の日常生活ではごく普通の会話形態であり、相手が初対面の学生でも違和感なく会話できたと考えられる。この点は会話の魅力度が著しく低下しなかったことから確認できる。このため、非敬語意識群では協働作業に本来必要な会話に注意を配分することができ、タイミング調整の役割をもつ発言が増加したと考えられる。会話の流暢さが高くなかった結果は、むしろお互いの意図や作業内容を確認しながら会話を進めたためと推測できる。

本研究は、協働的問題解決という社会生活で多く見られる場面を想定し、その作業過程で行われる会話は先行する状況に依存すること、そして過剰な敬語は参加者相互の会話の魅力を損なうこと、逆に日常に近い会話形態を使用することは実際の協働作業に促進的に作用することを示した。

引用文献

- Brown, P. & S. C. Levinson (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (ブラウン, P. & S. C. レヴィンソン田中典子 (監訳) (2011). ポライトネス: 言語使用における, ある普遍現象 研究社)
- 陳 文敏 (2003). 同年代の初対面どうしによる会話に見られる「ダ体発話」へのシフト: 生起しやすい状況とその頻度をめぐって 日本語科学, 14, 7-28.
- Hertel, G., & Fieldler, K. (1998). Fair and dependent versus egoistic and free: effects of semantic and evaluative priming on the 'Ring Measure of Social Values'. *European Journal of Social Psychology*, 28, 49-70.
- 明治安田生命名前ランキン2019の読み方ランキン50 (最終閲覧日: 2021/1/10)
(https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/read_best50/girl.html)
- 小川一美 (2000). 初対面場面における二者間の発話量のつりあいと会話者および会話に対する印象の関係 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 47, 173-183.
- 酒井智美 (2015). スピーチレベルシフトに関する研究 - 親しい先輩・後輩の会話をもとに - 東京女子大学言語文化研究, 24, 36-50.
- Smeesters, D., Warlop, L., van Avermaet, E., Corneille, O., & Yzerbyt, V. (2003). Do Not Prime Hawks with Doves: The Interplay of Construct Activation and Consistency of Social Value Orientation on Cooperative Behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84(5), 972-987.
- 須藤麻衣・宮崎圭子 (2017). ポライトネス表現 (敬語) がメールカウンセリングの効果に及ぼす影響の検討 (1) 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 14, 41-49.
- 滝浦真人 (2005). 日本の敬語論 - ポライトネス理論からの再検討 - 大修館書房.
- Watzlawick, P., Beavin, J., & Jackson, D.D. (1967). *Pragmatics of Human Communication: A study of interactional patterns, pathologies, and paradoxes*. New York: W.W.Norton & Company. (山本和郎 (監訳) (1998). 人間コミュニケーションの語用論 - 相互作用パターン, 病理とパラドックスの研究 - 二瓶社.)

Summary

The purpose of this study was to investigate the effect of the form of verbal expression on conversational behavior between two people during collaborative work. The experiment was conducted online using the Zoom conference, and participants participated in the experiment completely anonymously. The experimental participants were 50 university students. The results of this study suggest that different forms of verbal expression have different effects on conversational behavior between two people during collaborative work. Results of this study suggested that using honorifics more than necessary lower the attractiveness of the conversation. It also suggested that by using informal language for the collaborative partner, even if they met for the first time, facilitated to select words that have a role coordinating the progress of collaborative work.

Key Words : linguistic expression, collaborative work, remote communication partner.

(Received January 7, 2022)